View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

論　文

尚美学生の英語ニーズと国際語としての英語についての考察

大味　潤

Shobi Students'Needs in English and their Perspective toward World English

OOMI, Jun

Abstract

The researcher conducted a survey in his seven classes of English at Shobi University in April, 2009. The purpose of the survey was mainly for revising his curriculum and syllabus for future English courses. At the same time, he also asked his students of their opinions toward English as an International Language, or "World English," which was a world-wide trend in ESL society at that time.

The results show the students' unclear image toward English in the future. In spite of Japanese globalization in recent years, the students seem not to understand the need of English in job hunting or in their future workplaces. Along with their low self-evaluation on their English language ability, this research suggests we instructors take a more concrete approach to improve this wide-spread phenomenon.

This research also reveals the double standard of students have toward "World English," English as an International Language. That is to say, the students accept the notion that other people can communicate in Japanese-accented English, but, they refuse it for themselves. In other words, the results state that students do not accept the concept, "World English," nor they understand the fact that English is used as English as an International Language world-wide.

邦文抄録

カリキュラムやシラバスデザインに参考にする為、学生の英語に対する考え方やニーズそのものについて、担当する全７クラスで2009年度４月にアンケート調査を実施した。同時に英語教育界で叫ばれているワールドイングリッシュ、すなわち国際語としての英語についても学生の意見を尋ねた。その結果見えてきたのは、学生の将来の英語のニーズについての曖昧さである。日本社会の国際化が叫ばれて久しいが、学生達はその実態を実感出来ないまま、将来の就業についても英語使用の場面のイメージが掴めないままでいるらしいことが分かり、学生の英語力の自己評価が低いことも併せて、何らかの対策を講じる必

要性が示唆された結果になった。また同時に国際語としての英語、すなわち「ワールドイングリッシュ」に対する日本人学生の２面性が明らかになった。つまり他人が日本語訛りのままの英語を話すのは許容するが、自分自身がそのような英語を使うのは望まないと言う２重構造である。言い換えると、教育界のトレンドたる「ワールドイングリッシュ」が学生に全く伝わっていなかったこと、そして国際的に使われている英語の現状も学生には全く浸透していなかったことが窺える結果となった。

キーワード

英語教育（Teaching English as a Second Language）
第２言語習得（Second Language Acquisition）
学生モチベーション（Students' Motivation）
カリキュラムデザイン（Curriculum Design）
ワールドイングリッシュ（World English）

1. 序論

カリキュラムやシラバス作成の際、教員側は学生の授業態度や試験の成績を参考に次年度の方向を修正するが、一方で学生側がどのようなものを求めていたのか、あるいはこれからどのようなものを求めるのかについての具体的なデータはあまり持ち合わせいないのが現状である。

これは本校で英語科目を担当している筆者についても同様で、日頃の授業の学生の反応や試験結果から自分の授業に対してどう考えているのかは把握しているつもりではおり、またその感想も大学当局が行っているものに加えて、自身でアンケートを実施してデータを取ってはいるが、実際に学生が英語そのものに対してどう考えており、またどのような英語の授業を求めているのかについては明確なデータを持ち合わせていなかった。さらに何故学生の学習意欲が起きたり、または見られなかったりの理由については想像の域を超えていなかった。

そこで2009年度に担当していた全7クラスの学生を対象に「英語についてのアンケート」を実施し、学生の英語ニーズや英語に対する考え方について調べてみた。今回紹介するのは同年4月中旬に実施したアンケートのデータについての考察である。またこの際、英語教育界では常識となりつつあるワールドイングリッシュ、つまり国際語としての英語という概念についても学生がどのように感じ、どう考えているのかを質問項目に含めてみた。

実際には他の大学で担当していたクラスや、知り合いの大学講師に依頼して同時期に別の大学でもアンケートを実施しているのだが、サンプル数が非常に少ないこともあって、今回は尚美学園大学、かつ担当クラスのみについて一般動向に焦点を当てて論述していきたい。

2. 調査対象

今回の調査対象は2009年度に筆者が川越キャンパスで担当していた英語Ⅰの3クラス、並びに上福岡キャンパスの英語Ⅲの2クラス、英語インテンシブ再履修クラスの2クラスの履修者であり、その詳細は下記の通りである。尚、当日は欠席者が数人いた為、当日の回答者は7クラスで計153名である。

本論文冒頭

科目名	学年	学部学科	回答数	特記
英語Ⅰ①	１年生	総合政策学部共通	21名	再履修生含む
英語Ⅰ②	１年生	総合政策学部共通	28名	再履修生含む
英語Ⅰ③	１年生	総合政策学部共通	26名	再履修生含む
英語III③	２年生	情報表現学科	16名	
英語III④	２年生	情報表現学科	15名	
英語インテンシブⅠ＆Ⅴ	２～４年生	芸術情報学部共通	39名	再履修生のみ
英語インテンシブⅡ＆Ⅵ	２～４年生	芸術情報学部共通	8名	再履修生のみ
			合計153名	

＊芸術情報学部は情報表現学科と音楽表現学科の２学科を含む

尚、最下段の英語インテンシブⅡ＆Ⅵの学生数が極端に少ないのは、Ⅰ＆Ⅴと重複して履修しているものが数名いた為、データが重ならないようにその学生を除外してあるためである。ちなみに再履修の学生数名を除いては筆者とは初対面であるので、当方の授業内容の影響の無い学生がほとんどであると考えて良いだろう。

参考までに述べておくと、英語Ⅰ及び英語Ⅲは日本人教員が週１コマを担当する授業で、一方の英語インテンシブは本来日本人教員が週1コマ、英語ネイティブがもう１コマを担当する週2コマ制である。但し、当年の再履修の場合は2コマとも日本人教員の筆者が担当している。

尚、コース名称の後の〇囲みの数字は、入学時のプレイスメントテストによる区分であり、数字の小さい方から成績の高い順となっている。しかし担当している英語インテンシブは両方とも、再履修の学生を統合したクラスなので、この区分はない。

3. 調査方法

2009年度4月の初回もしくは2回目の授業終了時にアンケートを実施した（所要時間15分程度）。その為、当方の各授業内容はまだ影響していないと思われるので、英語の対する態度や英語に関する考え方は、恐らくそれまでに高等学校や大学に入学後に受講してきた英語クラスに基づいていると思われる。尚、質問項目やその順序、回答方法については、文末の参考資料として付随しているアンケートそのものを参照されたい。

4. 質問とデータ分析

アンケートの集計は筆者自身が分析し、また具体的な意見やコメントなど項目分けが必要な場合は分類した。アンケートの質問項目に学科やクラス名が含まれていたので、科目毎、専攻毎の分析も可能であったが、筆者が担当していたクラスのみを調査対象としている為、科目全体として解析するには不適当であった（例えば英語Ⅲであれば、筆者が③クラスと④クラスのみを対象にしていた為、他の教員が担当していた①クラスと②クラスのデータがない等）。故に今回は参考としてコース別、すなわち同じ科目名グループのデータは示すものの、基本的には担当クラス

全体の平均値データとして分析した。ちなみに指標数値は６段階評価（最小値1、最大値6、中間値3.5）である。

4.1　英語全般について

まずは英語全般に対する質問項目である。当アンケートでは問1、問2、問4にあたる。ここからは参考までにコース毎のデータも示す。尚、コース毎の回答人数が最大で2倍以上も異なる為に（英語Ⅰは75名、英語Ⅲで31名、英語インテンシブは47名）、コース間のデータ比較は今回行っていない。

質問項目	英語Ⅰ	英語Ⅲ	インテ	平均
問１．英語は好きですか。	2.83	2.58	3.72	3.05
問２．自分の今の英語力をどう思いますか。	2.00	1.83	2.23	2.06
問４．英語が選択科目でも、英語を取りますか。	3.33	2.71	2.98	3.10

＊インテ＝英語インテンシブ再履修クラス（以後同じ）

ここで興味深いのは、問2で自分の英語力は2.06、つまり「低い」としながらも、英語に対する興味は問1の通り3.05と中間値に近く、また問4のように選択科目でも取るとした学生も3.10とほぼ中間値であったことである。このことから自分の現在の英語力や興味、関心に拘らず、英語は履修しておいた方が良いと判断しているらしいことが伺える。但し、インテンシブ再履修の学生は、単位を取得出来ないまま繰り返し履修することになっている為か、他のコースに比べてこの傾向が弱く、さらに英語Ⅲの学生は何故か英語に対して全体として否定的である。これは前年度に受講していた授業内容が何らかの形で影響していたのであろうかと推測するが、詳細は不明である。

4.2　目指す英語力

次に問3で、「大学で身に付けたい英語力は何ですか」として希望する英語力を聞いた。但し、曖昧な解答を避ける為と分類を簡略化する目的で、こちらがこれまで観察して来た学生の傾向を考えて、予め選択肢として下記の通り15項目を挙げておいた。さらに「その他」として他の回答も記入できるようにしておいたのだが、「コミュニケーション力」と記述した回答1件があったに過ぎない。尚、全体の結果は以下の通りである。

ここからはデータをクラス別の回答数と全体の百分率で表すことにする。また各項目は質問用紙に並んだ順位ではなく、全体の回答数（パーセント）が多い順である。

まず意外だったのが、「読解力」と「リスニング力」がそれぞれ52％、49％で1、2番目に来ていることであった。調査対象となっていた学生はいずれもJETプログラムの英語補助教員の英語ネイティブの授業を中学校時代から受けている世代で、目の前の外国人に英語を使う訓練をしており、そのコミュニケーションへの興味や関心がそれまでの世代と比べて強いと予測していたのだが、希望する「大学で身に付けたい英語力」の筆頭は、自発的なコミュニケーション能力と言うより、寧ろ受動的能力に当たる読解力と聴解力であった。これは先述の問2の自分の学力の結果と合わせて考えると、英語の基礎学力にかなり不安を覚えている為と推測出来るだろう。

問３．大学で身に付けたい英語力は何ですか（複数回答可）。						
順位	選択項目	英語Ⅰ	英語Ⅲ	インテ	合計	%
1	読解力	47	16	18	81	52.3
2	リスニング力	41	13	22	76	49.0
3	日常（旅行）の英会話力	36	15	25	76	49.0
4	文法力	37	14	18	69	44.5
5	スピーキング力	24	7	25	56	36.1
6	語彙力	13	6	11	30	19.4
7	発音矯正	9	2	12	23	14.8
8	英作文（論文）力	8	4	5	17	11.0
9	ビジネス英会話力	5	3	6	14	9.0
10	TOEICでの高得点	4	0	7	11	7.1
11	翻訳の英語力	4	2	4	10	6.5
12	英検２級以上合格	4	1	4	9	5.8
13	通訳の英語力	4	1	4	9	5.8
14	英語のプレゼンテーション力	2	0	2	4	2.6
15	TOEFLでの高得点	1	0	1	2	1.3
16	コミュニケーション能力	0	0	1	1	0.6

加えて4番目に入っている「文法力」や、6番目の「語彙力」も同様に、英語の基本的な学力に自信が無い為と考えられるであろう。実際に授業を行っている印象からすると、この基礎的な「文法力」や「語彙力」低下は近年著しいので、学生側も同様に感じて回答したと考えるのが妥当であろう。

また2番目としてもう1つ挙げられた「日常の英会話力」は、中学校から大学までの学校教育ではあまり重要視されていない分野であるが、これらの学校で所謂「話す能力」として考えられている5位の「スピーキング力」や14位の「英語でのプレゼンテーション力」に比較して、恐らく現在の学生には需要があると考えて選択肢に加えたのだが、「リスニング力」と同数の回答を得て49％との結果で、凡そ予想通りだったと言える。これまでは一般の英語学校で習得するべきもの、2次的なものと考えられてきた英語力であるが、学生のニーズは高いようである。特にインテンシブでは「スピーキング」と共に回答数が一番多く、ネイティブスピーカーとの交流を経て、英語で話したい欲求が高まったと考えていいだろう。

ただ一方で選択肢としては「ビジネス英会話力」とした、仕事で使うであろう英語のニーズは全体的に低く、9番目にランクされ9％に過ぎなかった。続いて挙げられたのは、7番目の「発音矯正」、8番目の「英作文（論文）力」であった。ただいずれも15％以下でいずれもニーズが高いとは言えない。

さらに意外なのは、英語力イコール試験英語での高得点力、特に「TOEICでの高得点」という世間の潮流とは無関係に、学生の関心はこれら試験英語にはほとんど向いていないことである。TOEICは10番目で約7.1％（11名）、英検2級は5.6％（9名）であった。さらに正規留学に必須のTOEFLは最下位の15番目で約1.3％（2名）に過ぎなかった。特に英語Ⅲの学生にこの傾向が

本論文冒頭

顕著である。これが後述の通り、他の質問項目でも同様の傾向を示しており、専攻分野での英語ニーズの影響、もしくは1年次に履修していた英語Ⅰ、英語Ⅱで何らかの影響があったと考えられる。

総括すると、いずれも6割を越えない程度の回答であり、この数字が大きいか小さいか判断が難しいところではあるが、学生の間に英語に対する明瞭なニーズが無いという現状が見えてくる。すなわち、英語についてどのような将来像やニーズがあるのかが分かりにくく、英語をどう使うのか、また使いたいのかもまだ見えていないと感じた。その現状や理由については後述の質問に対する回答である程度明らかにしていきたい。

4.3 英語全般について

問5－1は、自分の人生で英語がどれだけ拘って来るかについての質問である。これは英語を履修している現在の学生生活から離れて、将来的に自分がどの程度英語に触れるのかを尋ねたものである。

質問	英語Ⅰ	英語Ⅲ	インテ	平均
問５－１：自分の人生に英語はどのくらい必要だと思いますか。	4.04	3.84	4.36	4.10

コース別に多少のばらつきはあるが、平均4.10ということで、自分の人生に英語は「おそらく必要」であると答えている。実はこの問5－1に関連して、問5－2として「それはどうしてですか。」とした質問項目があったのだが、問5－1での解答が否定的か肯定的かによって、あるいはそのニュアンスにより、回答内容が大きく異なりかつ複雑で、分類が非常に難しくなった為、今回は割愛しておきたい。

4.4 将来の仕事場での英語ニーズ

問6－1では「将来の仕事でどのくらい英語を使うと思いますか」と未来の英語ニーズを、またこれに関連して問6－2にて「英語を使う仕事と聞いて、どんなものを考えますか」と職業名を具体的に聞いた。ちなみに問6－2では選択肢を提示していないオープンクエスチョンであったので、以下のデータはアンケート集計後の分類作業によるものである。

質問	英語Ⅰ	英語Ⅲ	インテ	平均
問６－１：将来の仕事でどのくらい英語を使うと思いますか。	3.25	3.21	3.65	4.10

ここではインテンシブが僅かに高いものの、いずれのコースでも中間値の3.5近辺を示しており、学生が将来就く職業で英語が何らかの形で拘ってくるだろうと考えているだろうことが想像出来る。しかし、その割には数値が低いのが不可解であるが、その理由が次の問6－2の回答に暗に示されているようである。

問６－２：英語を使う仕事と聞いて、どんなものを考えますか。						
順位	分類項目	英語Ｉ	英語III	インテ	合計	%
1	通訳	45	18	20	83	53.5
2	外資系、国際系、外交官など	7	5	14	26	16.8
3	翻訳	5	8	9	22	14.2
4	航空会社関係（CA、パイロット他）	12	4	4	20	12.9
5	語学関係（英語教員、研究者など）	11	5	2	18	11.6
6	旅行関係（旅行会社、ホテルなど）	8	2	4	14	9.0
7	ビジネスパーソン	2	3	2	7	4.5
8	接客	0	2	3	5	3.2
9	営業、音楽、クリエーター	1	0	4	5	3.2
10	IT関係、エンジニア、専門系	1	1	2	4	2.6

まず特記すべきは、ランキング1位の通訳や3位の翻訳、5位の語学関係等の、語学そのものを職業にしているプロフェッショナルが多く挙げられていることであり、同様に2位の外資系、4位の航空会社関係、そして6位の旅行業者関係のように外国や外国人を連想させる職業が回答のほとんどであったことである。

当然と言えば当然であるが、問6－1の直後なのでこちらとしては学生に自分の職業として考えて欲しかったのであるが、どうも自分の仕事とは無関係のところで想像したようである。先述のように学生の専攻分野からすれば、ほとんど該当しない職種ばかりだと言えるであろう。言い換えるなら、将来自分が就くであろう職業で英語をどう使うかがほとんど想像出来ていなかったのではないかと思われる。実際に、この後に続く問7の回答でその理由が伺える。

4.5 卒業後の英語使用場面

次の問7では「卒業後に英語を使う場面」を具体的に書いてもらった。こちらもオープンクエスチョンであったので、学生が自由に回答したものをこちらが後に分類し集計したものである。

問７：卒業後、どんな場面で英語を使うと思いますか。具体的に書いて下さい。						
順位	分類項目	英語Ｉ	英語III	インテ	合計	%
1	海外旅行	30	12	13	55	35.5
2	国内・外人との接触	22	9	13	44	28.4
3	国内・仕事や勉強	17	6	19	42	27.1
4	日常（音楽・映画）	5	1	6	12	7.7
5	海外出張・留学	5	1	1	7	4.5
6	専門分野	1	3	0	4	2.6
7	使わない、分からない	1	1	2	4	2.6

この質問での回答では、1位の海外旅行と5位の海外出張・留学がそれぞれ直接海外に出向いた場面を考えたものと言える。但し、海外出張は留学を合わせても4.5％に過ぎず、ほとんど皆無であると言える。言い換えるなら、休暇やレジャー等の海外旅行で使うことが主であると学生

は考えていると言える。

2位に挙がった「国内での外国人との接触」であるが、これも仕事上での接触なのかがあまりはっきりせず、他の質問項目での回答内容から推測すると、道案内等の「接触」と取引先としての「接触」双方のケースが入っているようである。

また3位に入っている「国内・仕事や勉強」ではインテンシブの学生の回答が目立って多くなっているが、回答の内容を見てみると、各専攻の活動（映像、音楽）で実際に英語でのコミュニケーションを取っている学生が多かった為のようである。

このように、この問7に関しては、分類項目だけを見ると雑な区分になっているように思えるかもしれないが、回答はさらに曖昧な表現をしているので、データを分析するに当たってはかなり難しかったことを付け加えて置きたい。逆に言えば、英語を使う場面に関しては、いずれにしても学生があまり明確なイメージをもっていないと言えるであろう。

4.6 英語ネイティブへの憧れ

問8－1では英語ネイティブの発音への憧れや、自分自身がそのような発音を目指したいかを「英語ネイティブの発音に憧れますか。ネイティブのような発音で英語を話したいですか。」として尋ねた。これは後述の「ワールドイングリッシュ」について学生の態度や考えを聞く前段の質問である。

質問	英語Ⅰ	英語Ⅲ	インテ	平均
問８－１：英語ネイティブの発音に憧れますか。ネイティブのような発音で英語を話したいですか。	3.76	4.67	3.76	4.06

ここでは他の質問項目で全般的に低い評価をしていた英語Ⅲの学生の数値がやや高いが、英語Ⅰとインテンシブの学生の数値は同じで中間値の3.5を僅かに越えている。

そして次の問8－2でその理由を「それはどうしてですか。」と尋ねたが、ここでは次の通りに興味深い結果が出ている。

問８－２：それはどうしてですか。						
順位	分類項目	英語Ⅰ	英語Ⅲ	インテ	合計	%
1	かっこいい、きれいだから	23	7	19	49	31.6
2	通じない、通じにくいから	13	8	9	30	19.4
3	通じればいい、必要・興味なし	12	6	4	22	14.2
4	発音かくあるべし	0	3	5	8	5.2
5	役に立つ、自信になる	5	0	2	7	4.5
6	何となく、理由無し	3	0	2	5	3.2
7	無理だと思う	3	0	1	4	2.6

言うまでも無く、問8－1で「憧れる」と回答した学生が、単純に憧れを示した1位「かっこいい、きれいだから」、そしてその裏返しになる2位の「通じない、通じにくいから」、「こうあるべきだ」という4位「発音かくあるべし」、また実用的な5位「役に立つ、自信になる」と回答して

本論文冒頭

おり、逆に「憧れない」とした学生が、実用的もしくは消極的な3位「通じればいい、必要・興味なし」、または悲観論の6位「無理だと思う」と答えている。尚、7位の「何となく、理由無し」はどちらのグループの回答にも見られた。全体的にパーセントを見る限り、ネイティブの発音に「憧れる」学生は、1もしくは2で回答しており、「憧れがない」学生は主に3と回答していると言えよう。

コース別に見ると、先程の回答で「憧れ」度がやや強かった英語Ⅲのコースの学生が、あまり積極的に1位や2位に回答をしていない。まだ入学して日の浅い英語Ⅰの学生は、1、2位への支持が強いものの、3位への回答も多く約2対1の割合である。しかし一方で英語ネイティブの授業を大学でも履修した経験のあるインテンシブの学生は、ここでは強い「憧れ」を示しており、また同時に、実用的もしくは消極的に考えられる３位の「通じればいい、必要・興味なし」にはほとんど回答がない。この辺りも、英語ネイティブの教員とのコミュニケーションを通して、何らかの影響があったと考えた方が妥当な様である。

4.7 カタカナ発音について

次はこの英語ネイティブへの憧れを、表現を若干変えて尋ねたのが問9－1「英語は結構話せるのにカタカナ発音のままの人をどう思いますか。」であり、その結果は以下の通りである。

質問	英語Ⅰ	英語Ⅲ	インテ	平均
問９－１：英語は結構話せるのにカタカナ発音のままの人をどう思いますか。	2.88	2.80	2.65	2.81

この場合はカタカナ発音を最も肯定する場合が最大値で6、最も否定する場合が最小値の1なので、いずれのコースの学生もほぼ同様に否定的であると言えよう。またここでも英語ネイティブ教員との接触時間があったインテンシブの学生の数値がさらに低くなっていることも注意する必要がある。

尚、この回答の理由を尋ねた問9－2「それはどうしてですか。」という質問も設けられていたのだが、先述の問5－2と同様、関連した問9－1での解答が否定的か肯定的かによって、回答内容が大きく異なり分類が複雑になった為、今回は割愛しておきたい。

4.8 ワールドイングリッシュについて

最後にワールドイングリッシュそのものについての質問を2つ設けた。1つ目は問10－1で「ネイティブのような発音や文法・表現でなくでも、しっかり通じれば一人前の英語として認めようと言う考え方がありますが、それについてはどう思いますか。」とした。これは本来教員や研究者であれば「ワールドイングリッシュについてどう思いますか。」と尋ねれば済むことであるが、学生にはこの用語が理解されていない可能性が高いと判断したので、このような表現に言い換えたものである。尚、この質問もオープンクエスチョンであったので、分類はアンケート集計後に行っている。

これに続いて最後の質問は、問10－2として「自分自身は①『ネイティブのような英語』と、②『日本人のままの英語』のどちらがいいと思いますか。」とワールドイングリッシュを自分自

身が許容するかどうか尋ねた。それぞれの結果は以下の通りである。

問10－1：ネイティブのような発音や文法・表現でなくでも、しっかり通じれば一人前の英語として認めようと言う考え方がありますが、それについてはどう思いますか。						
順位	分類項目	英語Ⅰ	英語Ⅲ	インテ	合計	%
1	良い	25	9	10	44	28.4
2	通じればいい	22	9	12	43	27.7
3	反対、駄目、失礼	6	3	6	15	9.7
4	良いけど、出来ればネイティブ	4	0	5	9	5.8
5	人それぞれ、場合による	1	1	4	6	3.8
6	伝わらない	1	2	0	3	1.9
7	そのうちキレイになる	0	0	1	1	0.6
8	分からない	1	0	0	1	0.6
9	他人なら良いが、自分は嫌だ	0	0	0	0	0.0

このデータだけ見ると、次のような解釈が可能であろう。すなわち「3位の『反対、駄目、失礼』や4位の『良いけど、出来ればネイティブ』のような否定的な意見もあるが、双方合わせても15％にも満たない少数意見であり、一方で合計56.1％と6割近い学生が1位の『良い』や2位の『通じればいい』と回答しているので、『ワールドイングリッシュ』という言葉は知らなくても、学生の間でその市民権は既に得られている。」ようであると。

しかしこの次の問10－2「自分自身は①『ネイティブのような英語』と、②『日本人のままの英語』のどちらがいいと思いますか。」で日本人の本音と建前とも言うべきダブルスタンダード（二重の判断基準）が明らかになっている。

問10－2：自分自身は①『ネイティブのような英語』と、②『日本人のままの英語』のどちらがいいと思いますか。					
	英語Ⅰ	英語Ⅲ	インテ	合計	%
①『ネイティブのような英語』	46	22	35	103	66.5
②『日本人のままの英語』	15	5	6	26	16.8

先の質問、問10－1では、56.1％の学生が「ワールドイングリッシュ」に肯定的な回答をしていたはずだが、自分自身のこととなると、全く同じ学生ながら回答内容が逆転しており、否定的な回答が6割を越え66.5％にも上っている。

こちらもアンケートの質問項目や質問構成に際して、様々な予測をして挑んでいたのだが、日本人の「ワールドイングリッシュ」についての態度が、自分と他人でこれ程好対照をなすとは予想していなかった。つまり「日本語訛りの『ワールドイングリッシュ』は他人が使うなら何も異論はないが、自分自身がそのような英語を使うことには耐えられない。」と言うのが多数の意見であるように思われる。

またコース別に見ると、英語Ⅰ、英語Ⅲの学生は約1対4の割合で肯定派、否定派に分かれているが、インテンシブの学生はこの比率がさらに大きく約1対6に開いている。ここにもネイティブスピーカーとの直接の接触した経験が少なからず影響しているようである。これについては後に述べたい。

ちなみに、先の質問で回答数が0にも拘らず、9位として「他人なら良いが、自分は嫌だ」と挙げておいたのは、5位の「人それぞれ、場合による」という回答内容はあっても、この問10－2でこれだけはっきりとした回答があったにも拘らず、問10－1ではただの1人も回答していなかったことを明確にする為である。御了承頂きたい。

5. 結論

今回のアンケートの回答でまず明らかになったのは、学生の英語力に対する自己評価の低さである。筆者のこの数年の観察から判断したのと同様に、学生の基礎学力の不足は顕著であり、毎年のようにレベルは下がり続けている様に見えるが、学生もまた同じように感じているらしい。その為か、コミュニケーションの道具として、実際にネイティブスピーカーと触れ合う中で育んできたはずの「話す」「会話する」よりも、「読む」「聞く」のニーズが高いことが分かった。一方で高等教育機関が提供している「スピーチ」や「プレゼン技術」については、学生が然程関心を寄せていない事実もあるようで、寧ろこれまでは語学学校で習得してきたであろう「日常の英会話力」や「旅行の英会話力」により興味があるように思われる。

見方を変えると、これまでの日本の英語教育と同様、「読み」「聞く」と言った受動的能力に学生はやや関心が高く、対して能動的な「話す」や「書く」についてはその関心はやや低いままである。これはまた、基礎学力や語彙力が不足していることが起因していると考えられる。

一方で英語の将来のニーズそのものについては学生の間で明確なイメージが無いように思われる。例えば仕事での英語のニーズや将来的に出会うであろう英語使用の場面は、海外旅行や、国内で何かの際に出会う外国人と使う程度のものと考えている節がある。つまり漠然とした将来像しか持ち合わせていない為に、英語学習にも具体的な対策を打っていないまま学生生活を送っているようである。英語学習への意欲があまり高くないのも、このあたりにその原因があると思われる。

さらには就職活動で必須になりつつあるTOEICや、これまで知名度の高かった英検（2級）にも興味をほとんど示しておらず、また正規留学にも興味がないのか、TOEFLに対する関心も皆無に近かった。これは近隣諸国の韓国、台湾、中国の大学生が近年米国を始め英語圏で勉学や研鑽を積んでいる現状を考えると、かなり深刻な事態であると言えよう。

中でも調査前の予想と大きく異なったのは、学生のワールドイングリッシュ、すなわち国際語としての英語に対する考え方である。英語教育界やビジネス界では、英語ネイティブでなくても英語を使ってコミュニケーションを取り、仕事や勉学をこなすのが当たり前になっているのが現実だが、学生側がその実情をどこまで把握しているのか詳細は不明であるにしても、日本語訛りのカタカナ発音の英語は、まだまだ市民権を得ていないようである。また他人がそのような発音をしているのは一応認めるものの、自分自身の許容範囲ではないと回答しているところも、日本人の本音と建前が見え隠れしており、これからの英語教育のあり方にも示唆に富んでいるようである。

6. 終わりに

まずは問5－2や問9－2のように、回答がその前の設問と密接に関係のあるような場合、分類作業に主観が入り易いので、答え方をある程度予測して、分類や分析を容易かつ明確にするよう準備が必要である。この辺りは今回の反省点である。またアンケートの質問の中でも特にワールドイングリッシュについては、「カタカナ発音のまま」や「しっかり通じていれば」など、やや誘導的な表現があったことも反省材料である。今後はより中立的な表現を考えて行きたいと思う。

またネイティブスピーカーに触れ、実際の英語コミュニケーションを楽しんでいるはずのインテンシブの学生が、ワールドイングリッシュに対して否定的な回答を多くしており、発音や文法が気になるのか、自分の英語力に引け目を感じているらしいことが分かった。学生が気にしているのがネイティブからの反応なのか、それとも他の学生の目なのか、詳細はまた改めて調査する必要があるが、この結果からネイティブとの接触が学生に対しては、寧ろマイナス影響を及ぼしている可能性があるように思われる。

次に今後の調査に向けての示唆であるが、まず専攻別、コース別、学年毎に統計を取ることが肝要である。今回は筆者自身が担当しているコースのみを対象にした為に、アンケートの実施自体は容易であったが、専攻やコース毎にデータを収集しなければ、カリキュラムやシラバス等の効率的な編成や修正は難しく、学生全体にそのニーズに応じた授業を提供することは不可能であろう。無論、これには他の英語教員と共同作業が必要なので、今後お互いに協議や調整をしながら調査する必要がある。

またそのような授業改編の後で行った授業を1年間履修した後に、学生の態度や意見がどのように変化するのかを継続的、総合的に調査する必要がある。そしてそれが学生全体の学力向上や英語に対する肯定的な意識変革に繋げて行く必要もあるだろう。

さらに大学外に目を向けた時、他の大学であっても学生が類似した傾向を示した場合には、英語科相互の交流や意見交換なども計りたいものである。特に川越近辺の大学間で専門授業の単位の互換制度も始まっている現在、必修授業の英語においても学生のニーズに合わせて授業内容を特化することなどで積極的に参加しても良いのではないかと思う。

英語についてのアンケート調査（2009）

大学名：_____大学　学科名：_____

学年：　_____年生　性別：　女性　男性　曜日　時限

問１．英語は好きですか。

とても嫌い　　とても好き

1　2　3　4　5　6

問２．自分の今の英語力をどう思いますか。

とても低い　　とても高い

1　2　3　4　5　6

問３．大学で身に付けたい英語力は何ですか（複数回答可）。

□文法力　□語彙力　□発音矯正

□読解力　□リスニング力　□英作文（論文）力

□スピーキング力　□日常（旅行）の英会話力　□ビジネスでの英会話力

□TOEICでの高得点　□TOEFLでの高得点　□英検２級以上合格

□英語のプレゼンテーション力　□通訳の英語力　□翻訳の英語力

その他（　　）

問４．もし英語が選択科目でも、英語を取りますか。

絶対取らない　　絶対取る

1　2　3　4　5　6

問５－１．自分の人生に英語はどのくらい必要だと思いますか。

まったく必要ない　　とても必要である

1　2　3　4　5　6

問５－２．それはどうしてですか。

＊裏面に続く↓

問６－１．将来の仕事でどのくらい英語を使うと思いますか。

全然使わない　　日常的に使う

１　２　３　４　５　６

問６－２．英語を使う仕事と聞いて、どんなものを考えますか。

問７．卒業後、どんな場面で英語を使うと思いますか。具体的に書いて下さい。

問８－１．英語ネイティブの発音に憧れますか。ネイティブのような発音で英語を話したいですか。

まったく思わない　　非常に思う

１　２　３　４　５　６

問８－２．それはどうしてですか。

問９－１．英語は結構話せるのにカタカナ発音のままの人をどう思いますか。

とても悪いことだと思う　　とても良いことだと思う

１　２　３　４　５　６

問９－２．それはどうしてですか。

問10－１．ネイティブのような発音や文法・表現でなくでも、しっかり通じれば一人前の英語として認めようと言う考え方がありますが、それについてはどう思いますか。

問10－２．また自分自身は①「ネイティブのような英語」と、②「日本人のままの英語」のどちらがいいと思いますか。

＊ご協力ありがとうございました。

本論文冒頭